

|||||
書店関係者にお問い合わせページ

洋書店よもやま話

||||| ナウカ株式会社西日本営業部 鳥居 万恭 |||||

皆さんの中で、大阪心斎橋筋が本の街であった事を知っている人はほとんどおられないでしょう。今日、ファッションナブルな心斎橋筋にその面影はどこにも残っていません。頃は江戸中期から大正末期までのお話です。『攝津名所図絵大成』（刊記1830年頃）、巻之十三下に「心斎橋通書籍」の一文があります。「船場より嶋の内にいたり……、書林数百家此方彼方に……、軒をつらねて繁盛なり」。この一文から大阪の町人文化が花を咲かせていた背景を書店数で見ることができます。江戸時代の「大阪本屋仲間」は最大数三百名を越した時もありました。京都では寺町から丸太町、熊野神社あたりまでが仏教文化を基本とした書籍街でした。明治になってからの心斎橋筋書籍街の様子は、『湯川松次郎著 上方の出版と文化』（1960年出版）に「1910年代の書店名入り地図」が掲載され、いわゆる心斎橋北詰から北へ八百メートルの間に七十軒の書店があった事がわかります。この中に洋書（外国書籍）を取り扱う本屋はわずか二軒だけでした。

第一の書店は北久宝寺町にあった「丸善書店」です。現在も当時も外国書籍取り扱い最大手の丸善株式会社の大阪支社のことです。『丸善百年史』には田山花袋の一文を引用しながら「日本の近代化は丸善をくぐってなされたということ、決して自画自賛ではない」と「企業理念と歩み」を高らかにうたっておられます。明治以後の学術歴史を紐解いていくと「丸善」が果たした役割は文化の伝達者であり文化の収蔵庫であった事がよくわかります。この時代の外国書籍のもつ重みがなせる業だと思えてなりません。第二は南久宝寺町に「荒木和一洋書店」と記載があります。わかることはこれだけですが、明治時代に洋書輸入業者で「丸善」以外始めて知る本屋名です。明治時代を考え、関西の文化を考えると否応なく気になる書店であり人物です。その後、どのような変遷をしていったのか資料を探すが

未だに解明できません。「丸善」はアメリカ書籍を中心にイギリス、ドイツ、フランス語書籍と拡販していくのですが、「荒木和一洋書店」はどこの国の書籍を輸入していたのか興味がつる一方です。各大学図書館収蔵庫に入って仕事をしていると、いつか「荒木和一」の痕跡に遭遇するのではないかと「淡い恋心」が湧いてきます。

関西の洋書業界で忘れてはならない本屋が二軒あります。江戸時代中期から心斎橋安土町で漢籍を販売していた「北尾万助書店」です。漢籍は当時としては最高の学問文化であり、「北尾」はその窓口であったわけですが。1879年に朝日新聞が創刊されると、大阪における同紙の売捌元になります。時代の流れに敏感だったのです。戦後、現在の北尾書籍貿易株式会社へと変遷し、大阪を本社とする中小規模の洋書輸入業者として現在にいたっています。もう一軒はユニークな男が作った本屋です。親日亡命ロシア人ニコライ・マトヴェーエフの「ミール書店（平和書店）」です。1907年にウラジオストク市議会議員をしていた彼がロシア革命で亡命来日します。1919年8月1日付け大阪毎日新聞には本人及び店舗の写真付きで曾根崎にロシア語書籍出版所「平和」を開設した記事が掲載されています。日本において初めてロシア語書籍出版および小売業を始めます。ロシア語で「ミール」書店と看板を掲げ関西一帯だけでなく東京までセールス活動を行っていきます。彼が描いた世界は単に書籍の売場だけでなく、日露戦争後の日本とロシアの文化交流の場を構築していくものでした。日本の研究機関は彼からどれほどの恩恵を被ったか、でもそれを理解できた人々は今ではほとんど存在していません。

各洋書店の歴史を追いかけると時代が読めるような気がしてなりません。昭和に入ると外国書籍は敵国の書籍に変わり、輸入制限がなされます。時代は音をたてて軍国主義の国づくりに走り出していくのです。それと比例するように心斎橋筋から本屋が消えていきます。真に洋書業界が存立するには戦後をまたなければならなかったのです。

とりい かずやす（前京都営業所所長）